



筑摩世界文學大系

41

トルストイ

I

木村彰一 訳



アンナ・カレーニナ

筑摩書房

筑摩世界文學大系 41

昭和四十六年二月十日

初版第一刷発行

トルストイ I

訳者代表

木村 彰 一

発行者

竹之内 静雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(一九一)七六五一

振替口座東京四一二二三

印刷 大日本法令印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20641 (出版社) 4604

目次

アンナ・カレーニナ

木村彰一 訳 5

アンナ・カレーニナ論

トーマス・マウンテン 訳 587

解説

木村彰一 598

年譜

609

トル
ストイ
I

アンナ・カレーニナ

復讐するは我にあり、我これを報いん

第一篇

一

幸福な家庭はどれもみな似たりよったりだが、不幸な家庭は不幸のさまがひとつひとつ違っている。

オプロンスキイ家では何もかもめちやくちやになつてしまつた。夫が以前家にいた家庭教師のフランス婦人と関係していたことを知つた妻が、こうなつたらもう同じ屋根の下では暮らせないと夫に向かって宣言したのだ。この状態はもう三日もつづいていて、当の夫婦も家族一同も召使たちも、苦しいほどそれを意識していた。家族一同や召使たちは、自分たちの共同生活は無意味であり、どんな宿屋にたまたま泊り合わせた連中でも、自分たちオプロンスキイ家の家族や使用人に比べればまだしも互いつながりがあると感じていた。妻は居間にこもりきりだ

つたし、夫は夫でもう三日も家を明けていた。子供たちは捨て鉢のていで家じゅう駆けずり回つていた。家庭教師のイギリス婦人は家政婦と言ひ合ひをしたあげく、女友達にあてて新しい勤め口を見つけてほしいと手紙を書いた。コックはまだきのうのうちに、夕食の時刻をねらつて家を飛び出してしまつた。炊事婦と御者とは暇を願ひ出していた。

妻と仲違いをしてから三日目の朝、公爵ステパン・アルカージイチ・オプロンスキイ——社交界での通称ステイーヴァは、いつもの時刻、つまり午前八時に、妻の寢室でなく自分の書斎の、モロッコ革のソファの上で目をさました。もう一度ゆっくり寢直そうとも思つたのか、彼は手入れのいい肥満した体をソファのスプリングの上でぐるりと回転させ、枕の反対側をぎゅつと抱きしめてそれに頬を押しつけたが、突然ぱつとはね起きると、ソファの上になすわつて目を開けた。

『ええと、あれはどんな具合だつたかな?』夢を思い出そうとしながら彼は考えた。『ええと、どんな具合だつたかな?』そうだ! アラービオンがダルムシュタットで晩飯をおごつてくれたんだ。いや、ダルムシュタットじゃなくて、なにかアメリカふうな感じのところだ。うん、そなた。ところが夢の中じゃ、ダルムシュタットがアメリカにあつたんだ。そうそう。アラービオンはガラスの食卓でおごつてくれたつ。そう、——そしてその食卓が *Enio tesoro* (「わが宝」、歌劇 *ドン・ジョヴァンニ* の *アリア* の一つ) を歌つたんだ。いや、*Enio*

tesoro じゃなくて、もっとまじな歌だ。それから小さな水差しみたいなものがずらりと並んでいて、その水差しが実は女だつたんだ』そんなことを彼は思い出した。

オプロンスキイは楽しげに目をかがやかせ、微笑しながら物思いに沈んだ。『そうだ。いい気持だつた。実にいい気持だつた。あのほかにもすてきなことはまだたくさんあつたんだが、言葉じゃ言えないし、だいいち、目がさめたあとじゃ筋道立てて考えることさえできやしない』ラシャのカーテンの脇から射し込んでいる光の縞に気づくと、彼はいそいそと両足をソファからおろし、その両足で妻の手縫いの(去年の誕生日に贈られたのだ)金色のモロッコ革で縁どつたスリッパを探り当て、それから九年越しの古い習慣で、坐つたまま寢室のいつもガウンを掛けておく場所へ手をのばした。そのとき突然、彼は自分の寝ている場所が妻の寢室でなく、自分の書斎だつたこと、そしてそれはなぜかということを感じ出した。微笑が顔から消え、額に皺が寄つた。

『ああ、ああ、ああ! ああ!』例の一件を逐一思い起こしながら彼は呻いた。妻との仲違いのこまかないきさつ、八方塞がりの自分の立場、それに原因は自分にあるという特別悩ましい思ひが、またしても胸に浮かんた。

『そうだ! あれは許してはくれまい。また許せるはずもないのだ。何より始末が悪いのは、すべての原因がおれにありながら、——このおれにありながら、しかもおれに罪はない、とい

うことだ。一切の悲劇はここにあるのだ。彼は思った。『ああ、ああ、ああ！』今度の仲違いで自分が受けたいちばんつらい印象を思い浮かべながら、彼は絶望の呻きをあげた。

何にもまして不愉快なのは、あの最初の瞬間であった。彼は陽気なみちたりた気分、妻へのみやげに特別大きな梨を一つ持って芝居から帰ってきたのだが、妻は客間には見当たらず、驚いたときには書斎にはいなかった。最後に彼は寢室へ行つて、そこではじめて、一切を暴露したあの呪わしい手紙を手にしている妻の姿を目にしたのである。

たえず屈託ありげな顔をして忙しそうにたちまはたっている彼女、かねてから気のきかない女だと思っていたあのドリイが、手紙を手にして身動きもせずに坐ったまま、恐怖と絶望と憤怒の色を浮かべてじっと彼を見つめたのだ。『これはなんですか？ これは？』手紙を指さしながら彼女はこうたずねた。

よくあることだが、オプロンスキイがこの場面を思い出すたびに苦しい思いをさせられるのは、事件そのものよりはむしろ、こうした妻の問いに対する自分の応対の仕方であった。

その瞬間彼は、何かひどく恥ずかしいことをしている現場を不意に押えられた人間がするのと同じことをしてしまったのである。悪事が露見した以上妻に対して取らざるをえなくなった立場にふさわしい顔つきを、彼はして見せることができなかった。憤然とするとか、事実を否認するとか、釈明するとか、詫びを入れるとか、

——ないしは思いきって平左をきめこむとか、——そうした態度のどれを取っても、彼がやったことに比べればまだしもましだったろう！——ところが彼の顔はまったく無意識に

〔脳の反射作用だ〕生理学に興味のあるオプロンスキイはふとそう思った、まったく無意識に、突然、いつものように人のいい、それゆえまた愚かしい微笑を浮かべてしまったのである。あの愚かしい微笑だけは、彼もわれながら許せない気がした。この微笑を見るなり、ドリイは肉体的な苦痛でも感じたようにびくりと身をふるわせ、持ち前の激しい気性に任せて手ひどい言葉をたてつづけに浴びせかけるなり、そのまま部屋を飛び出していった。それ以来、夫の顔を見ようともしないのである。

『何もかもあのばかげた微笑のせいだ』オプロンスキイは思った。

『それにしても、いったいどうすればいいんだ？ どうすれば？』彼は苦しまぎれにそう叫ぶだけで、答えは見つからなかった。

二

オプロンスキイは自分に対しては正直な男であった。自分で自分をあざむいて、おれは自分の行為を悔いているなどと無理に思い込むことはできなかった。自分が、男ぶりがよくて惚れっぽい三十四歳の自分が、健在な五人の子供と早死にした二人の子供の母親であり、年も自分より一つしか若くない妻に惚れていないからといって、今さらそれを後悔する気にはなれな

かった。彼が後悔していたのは、もっと上手に妻をごまかすことができなかったという、その一点だけであった。しかし自分の立場のむずかしさは十分感じていた。妻も子供たちも自分もみんなかわいいのだとは思っていた。もしあの発見がこれほど深刻な打撃を妻に与えるかわかっていたら、あるいはもっと上手に自分の過ちを妻にかくしおおせたかもしれない。はつきりこの問題を考えてみたことは一度もなかったが、彼はかねがね漠然と、妻がずっと前から自分の浮気に気づいていて、しかも見て見ぬふりしているのだ、という気がしていた。それどころか、あれはやつれて、年をとって、もう美しくもない女、一家のよき母であるというだけが取柄の、これといって別に人目をひくところもない平凡な女なのだから、公平という見地からも自分を大目に見てくれるのが当然だなどとさえ思っていた。ところが結果はまるで反対だった。『ああ、えらいことになった！ いやはや！』えらいことになった！ オプロンスキイは自分にむかってそう繰り返すばかりで、いい知恵は一つも浮かばなかった。『あの一件が起きるまでは、何もかも実にうまく行っていて、申し分のない暮しだったんだがなあ！ あれは子供たちに満足してしあわせだったし、おれはおれで口出しは一切せず、子供の世話も家政もあれの好きなようにやらせていたからな。もっとも、あの女が住込みの家庭教師だったのは、たしかにまずかった。なんといつてもまずかった！』自分の家の家庭教師を口説くなどというのは、

どうも月並みで品が悪いからな。それにしてもたいした家庭教師だ！（彼はE. The Roland (ル・ロラン)のいたずらっぽい黒い瞳と、その微笑とを生きいきと思ひ浮かべた。）しかし、あの女がうちじやないか。何より始末が悪いのは、あの女がもう……。どうしてこう、何から何までわざと仕組んだみたいな結果になったんだろう！ やれやれ！ それにしてみても、いったいどうすれば、どうすればいいんだ？』

答えはなかった。もつとも、いちばん複雑な解きたい問題に対して人生が与える、あの一般的な答えならあった。日の要求に従って生きるがいい、つまり自分を忘れるがいい、という答えである。しかし眠りによって自分を忘れることはもうできない。少なくとも夜まではできない。かといって、あの水差しすいさしの女たちが歌った音楽へ今さらち戻るわけにもいかない。だとすれば、生活の夢によって自分を忘れるしかない。

『いずれは目鼻がつくさ』オブロンスキイは自分にそう言いかけると、立ち上がって、空色の絹の裏地をつけたねずみ色のガウンを羽織り、総のついた紐を結び、幅広い胸郭きょうかくに思う存分空気を吸いこむと、肥満した体を外髒そとぞうの両足にのせて軽々とはこびながらいつもの元氣な足取りで窓に歩み寄り、カーテンをひきあげ、大きな音を立ててベルを鳴らした。ベルに應えてすぐにはいってきたのは、古いなじみの従僕マトヴ

た。マトヴエイにつづいて、顔剃りの道具をさげた理容師もはいってきた。

「役所から書類がとどいているかね？」電報を受け取って鏡の前に腰をおろしながら、オブロンスキイはたずねた。

「お机の上にございます」マトヴエイはそう答えて、物問いたげな、さも同情したような視線を主人に向け、ちょっと間をおいてから、ずるそんな微笑を浮かべてつけ足した。

「例の辻馬車屋のおやじが使いをよこしました」

オブロンスキイはそれにはひと言も答えず、ただ鏡にうつったマトヴエイをちらと見ただけであった。鏡の中で二人が交した視線は、二人とも相手の腹のうちがわかっていることをはっきりあらわしていた。オブロンスキイの視線は、『なぜそんなことを言うんだ？ おまえだって知ってるはずじゃないか？』と問いかけているようであった。

マトヴエイはモーニングコートのポケットへ両手を入れ、片足をうしろへ引くと、人のよきそうな顔にかすかな微笑を浮かべながら、無言で主人の方を見た。

「今度の日曜に来るように、それまでは旦那さまをおさわがせしたり自分でよけいな気をもんだりしてはならん、と申しつけておきました」彼はそう言った。明らかに予習ずみの台詞せりふだった。

オブロンスキイは、マトヴエイがわざとおどけて自分の注意を惹こうとしているのだと悟っ

た。彼は電報の封を切って、ご多分に洩れず間違いだらけの電文を当て推量で訂正しながら読み下し、急に晴ればれとした顔つきになった。「マトヴエイ、妹のアンナが必ず来るよ」彼は理容師の色艶のいいふくらした手をちょっとのあいだ押しとどめながら言った。ちょうどちぢれた両の頬ひげの間の、ばら色の小道を剃っているところであった。

「それはよろしゅうございましたな」マトヴエイはそう言ったが、この返事で彼は、今度の来訪の意味を、つまりオブロンスキイのお気に入りお気に入りの妹アンナが夫婦の和解に力を貸してくれるかもしれないということを、自分も主人と同じようによく承知していると匂わせたつもりだった。

「おひとりでございますか、それとも旦那さまもごいっしょで？」マトヴエイはたずねた。

理容師がちょうど上唇にかかったところなので、オブロンスキイはものが言えず、指を一本立ててみせた。マトヴエイは鏡に向かつてうなずいた。

「おひとりでございますな。お二階に支度をさせておきましょうか？」

「奥さまに申し上げて、お指図どおりはからつてくれ」

「奥さまにでございますか？」何か腑ふに落ちぬらしく、マトヴエイはそう問い返した。

「うむ。申し上げてくれ。この電報も持っているって、お渡ししたうえでお指図をきいてくるのだ」

『さぐりを入れるおつもりですな』とマトヴェイは納得したが、口に出しては、ただ、「かしこまりました」と言っただけであった。

オプロンスキイがもう顔を洗い、髪もかまして、これから着替えにかかろうとしていたとき、マトヴェイが電報を手持って、一足ごとに長靴をきゆうきゆう鳴らしながら、ゆっくりと部屋へ戻ってきた。理容師はもういなかった。

「奥さまは自分は家を出るからそうお伝えしてくれとおっしゃっていらっしやいます。万事あのかたの、つまり旦那さまのお好きなようにはからってよろしい、とのことでございます」
彼は目もただけで笑いながらそう言うと、ポケットに両手を入れ、首を横にかしげて、じっと主人を見つめた。

オプロンスキイはしばらく黙っていた。やがて彼の端整な顔に、人のよさそうな、いくらかあわれっぽい微笑が浮かんだ。

「どうかね？ マトヴェイ？」首を振りながら彼は言った。

「なんでもございませぬよ、旦那さま。丸くおさまりますよ」マトヴェイは言った。

「丸くおさまるかね？」

「さようで」

「そう思うかね？ おや。だれ、そこにいるのは？」ドアの向うに女の衣ずれの音をききつけて、オプロンスキイはそうたずねた。

「わたくしでございます」しっかりした、気持ちのいい女の声がそう言い、ドアのかけから保母マトリョーナ・フリモノヴナのいかついあ

ばた顔がのぞいた。

「なんだね、マトリョーナ？」戸口に立っている保母の方へ出ていきながらオプロンスキイはたずねた。

妻との一件でどう見ても申しわけの立たないことをしたのはオプロンスキイのほうであり、彼自身もそう感じていたくらいなのに、家の者はほとんど全部、ドリイといはん仲のいい保母まで含めて彼の味方なのであった。

「なんだね？」沈んだ調子で彼はたずねた。

「旦那さまのほうからお出かけになって、もう一度お詫びをなさいまし。きっと神さまがお助けくださいます。それはもうひどいお嘆きですよ、見るのもおいたわしいくらいでございますし、それにお邸やきの中がもうめちゃくちゃでございます。旦那さま。お子さまがたをあわれんであげてくださいまし。お詫びをなさいましよ、旦那さま。いまさらどうなりましょう！ 蒔いた種は……」

「だってあれは会いたくないと言ってるじゃないか……」

「ご自分のことだけなさればそれでよろしいのでございます。神さまのお慈悲におすがりしてお祈りをなさるのでございます。旦那さま、お祈りをなさいまし」

「よしよし。さ、もうあっちへ行ってくれ」オプロンスキイは急に顔を赤らめて言った。「さあ、着替えにしよう」マトヴェイに向かって言ううと、彼はぱっとガウンをぬいだ。

マトヴェイはもうさつきからワイシャツを馬

の首輪のように丸めて手にささげ持ち、目に見えぬ埃を口で吹き払っていた。そして明らかに満足の色を浮かべながら、手入れのどいた主人の体にそれをかぶせた。

三

着替えをすますと、オプロンスキイは体に香水を振りかけ、シャツの袖口をなおし、慣れた動作で煙草、紙入れ、マッチ、二重鎖と下げ飾りのついた時計などをそれぞれさまたげたポケットへ入れ分け、ハンカチをひと振りして、自分が例の不幸な事件にもかかわらず清潔で、いい匂いがして、健康で、肉体的に潑刺せきせきとしているのを感じながら部屋を出ると、一步一步かすかに体をふるわせるような歩きつきで食堂へ行った。食堂ではもうコーヒーが彼を待ち受けていた。コーヒーのそばに何通かの手紙と役所からとどいた書類がおいてあった。

彼は手紙に目を通した。一通はひどく不愉快な手紙で——妻の領地にある森林を買い取ることになっている商人から来たものであった。この森林は、どうしても手放す必要があったのだが、妻との和解ができていない現在、こうした取引きは問題にもならなかった。この場合何よりも不愉快なのは、妻との和解というさしせまった用件の中へ、金銭上の利害がはいるこんできたことであった。自分はその利害に気を取られるかもしれない、森林を売るために妻との和解を求めるかもしれないという考え、——そうした考えが彼の心を傷つけた。

手紙を全部読みおわると、オプロンスキイは役所からとどいた書類を手もとに引き寄せて、そのうちの二つにすばやく目を通しながら太い鉛筆で所要所に印をつけ、それから書類を押しやってコーヒーにとりかかった。コーヒーを飲みながら、彼はまだインクがよく乾いていない朝刊をひろげて読みはじめた。

オプロンスキイが購読していたのは自由主義的な新聞、それも過激なものではなく、大多数の人間が支持する傾向のものであった。実を言うと学問にも芸術にも政治にも関心はなかったのであるが、にもかかわらず彼はこれらすべての事柄に対して、大多数の人間や彼の新聞がいだいているのと同じ見解を固持し、大多数の人間が見解を変えるときにかぎって自分も見解を変えた。というよりはむしろ、彼が見解を変えるのでなく、見解の方がいつのまにか彼の内部でひとりりて変わるのであった。

オプロンスキイが思想傾向や見解を選ぶのではなく、それらの思想傾向や見解がひとりりて彼のところへやってくるのであった。それはちょうど、彼が帽子やフロックの型を選ばずに、みんなが身につけているものを買うのと同じであった。ところで彼のように特定の社会に生活し、ある種の思索活動に対して多くは壮年期に頭をもたげる欲求を感じている人間にとっては、見解を持つということは帽子を持つのと同じくらい必要なことであった。自分の属する社会でこれまた信奉者の多い保守主義的傾向のかわりに、彼が自由主義的傾向を選んだ理由がもしあ

るとすれば、それは彼が自由主義的傾向をより合理的だと見なしていたからではなく、そのほうが自分の生活様式に似つかわしいからであった。自由主義の政党はロシアでは何もかもうまく行かないと説いていたが、なるほどそう言われればオプロンスキイは借金が山ほどあり、しかもひどく金に不自由していた。自由主義の政党は結婚は時代おくれの制度だから改めなくてはならぬと説いていたが、なるほどオプロンスキイは家庭生活からたいした満足が得られぬばかりに、たえず嘘をついたり仮面をかぶったりせねばならず、しかもこれはまったく彼の本性に反していた。自由主義の政党は宗教は国民の非文化的な層にはめる轡むちにすぎないと説いていた、というよりはむしろほめかしていたが、なるほどオプロンスキイは短い祈禱きとう式すら足の痛みなしには我慢ができず、この世でもけっこう愉快に暮らしていけるというのに、何を目当てにああしたぞっとするような大げさな言葉を使って来世のことを言うのか、いっこうに合点がいかなかった。同時にまた、愉快な笑い話の好きなオプロンスキイは、ときどき、(ロシア最初の王朝も血統を誇るなら、リューリク(の伝説的な始祖))から先へはさかのぼらずにおいて、人類の始祖——つまり猿を否定するのはおかしい、などと説いて温和人間を当惑させては快感を味わっていた。こんなわけで、自由主義的傾向はオプロンスキイの習慣になってしまった。頭の中に軽い霧を発生させてくれるからという理由で、ちょうど食後の葉巻を愛するように自分の新聞

を愛していたのである。論説にも目を通したが、そこにはこんなことが説いてあった。現在、過激思想は一切の保守的要素を呑みつくす危険があるとか、政府は革命という怪物を弾圧するための手段を講ずべきだとか、そうしたことを声を大にして叫ぶ者がいるが、これはまったく謂いれのないことであり、むしろこれとは逆に、へわれわれの見解によれば、危険は革命という架空の怪物にあるのではなく、進歩にブレーキをかける因襲の根強さにある」というのである。もう一つ財政関係の論説も読んだが、それはペンサムとミルを引き合いに出して暗に大蔵省を諷刺したものであった。生れつき頭の回転の早い彼は、その諷刺の意味が、つまりこれはだれがだれをどういふ一件で諷刺したものか、ということが完全にわかり、そのことはいつものように彼にある種の満足を与えてくれた。しかしきょうは、マトリョーナの忠告や家の中が少しもうまく行っていないことが頭にあるので、せっかくの満足感も台なしであった。ペイスト伯がヴィースデンへ旅行したらしいとか、これからはもう白髪しろがみはなくなるとか、軽装箱馬車売うりりしたとか、職を求む、当方妙齡の婦人とか、そうした記事にも目を通したが、この種の記事もこれまでのようにしずかな皮肉な満足をもたらしはくれなかった。

新聞を読み終え、二杯目のコーヒーを飲み、バターつきパンを食べてしまうと、彼は立ち上がってパン屑をチョッキから払い落とし、幅の広い胸をぐっと張ってさもうれしげにこっり

笑ったが、それはべつに心の中になにか特別楽しいことがあったからではない。——うれしげな微笑を誘い出したのは、彼の抜群な消化力であった。

しかしこのうれしげな微笑は、たちまちあらゆることを彼に思い出させた。彼は考え込んでしまった。

二人の子供の声が（オブロンスキイにはそれがいちばん下の男の子のグリーンシャと、長女のターニャの声だとわかった）、ドアの向うで聞こえた。何かに乗せてものを運んできて、それを落としたりしない。

「だから言ったじゃないの、屋根に旅客を乗せちゃだめだって」女の子は英語で叫んだ。「さ、拾って！」

『何もかもめちゃくちゃだな』とオブロンスキイは思った。『子供たちまでああして勝手にとびまわっているのか』彼はドアへ歩み寄って、二人を呼んだ。二人は汽車がわりの箱を放り出して、父親のいる部屋へはいってきた。

女の子は父親の秘蔵っ子らしく、一目散に走り込んできて父親に抱きつくなり、いつものように笑い声を立てて首にぶらさがり、父親の頬ひげから発散するなじみ深い香水の匂いを楽しんだ。そして最後に前かがみの姿勢のために赤くなつた、やさしさにかがやく父親の顔に接吻すると、両手を離してまた走り出ようとした。

しかし父親はそれをひきとめた。

「ママはどうしてる？」娘のすべすべしたやわらかな首を撫でてやりながら彼はたずねた。

「おはよう」朝の挨拶をする男の子には、微笑しながらそう言った。

彼は男の子に対する愛情が足りないことを自覚していたので、いつもつとめて公平な態度を取ろうとした。けれども男の子はそれを感じとって、父親のつめたい微笑に微笑で応えることをしなかった。

「ママ？ ママは起きたわ」女の子が答えた。オブロンスキイは溜息をついた。『してみると、またひと晩じゅう眠らなかったとみえる』彼はふとそう思った。

「どうだね、ママは機嫌がいいかね？」

女の子は、父親と母親とは仲違いをしているから母親は機嫌のいいわけがないこと、父親もそれを知らないはずはないこと、それなのにこんな軽々しいいきき方をするのはとぼけているのだということを知っていた。それで父親のために顔を赤らめた。彼もすぐにそれがわかって、やはり顔を赤くした。

「知らないわ」女の子は言った。「お勉強はよ歩いて、ミス・ハルとおばあちゃんのお家まで散歩いらいっしょいって、そうおっしゃったわ」「そうか。それじゃ行っておいで、ターニャちゃん。ああ、そうだ。ちょっとお待ち」またもや娘をひきとめて、やわらかな手を撫でながら、彼はそう言った。

彼はマントルピースの上からきのうそこへ載せておいた菓子箱を取って、チョコレートと水あめと、娘の好きなのを二つえらんで渡した。「グリーンシャの分？」女の子はチョコレートを

指さしながら言った。

「うん、そうだよ」彼はもう一度娘の小さな肩を撫で、娘の髪の毛のつけ根と首に接吻し、そして離してやった。

「お馬車の用意ができております」マトヴェイが言った。

「それからご婦人のかたがお一人請願にお見えになっております」

「だいぶ前からかね？」オブロンスキイはたずねた。

「三十分ほど前から」

「人が来たらすぐに取りつけと何度も言っているじゃないか！」

「でも、せめてコーヒーぐらいはゆっくり召しあがっていただけませんと」マトヴェイはまともな腹の立てられないような親しみのこもったぞんざいな口調で言った。

「よし。早くお通ししろ」オブロンスキイはいまいmissに顔をしかめながら言った。

請願者はカリニン二等大尉夫人といい、まるで見当はずれな突拍子もないことを頼みに来たのであった。しかしオブロンスキイは、いつもの習慣どおり客をすわらせ、途中で口出しをせずに最後まで注意ぶかく話をきいてから、だれにどう頼めばいいかを事こまかに教えてやり、そればかりか、力になってくれそうな人物にあってた紹介状を、大きな横に長くのびた美しい明晰な書体で書きわよくさらさらと書いてやった。二等大尉夫人を帰してしまおうと、オブロンスキイは帽子を取り、何か志れたことがないかどうか

かを思い出そうとしながらその場にたたすんだ。べつに何も忘れてはいなかった。忘れたかと思ふこと、——つまり妻のこと以外は。

『ああ、そうだった！』彼はうなだれた。端正な顔が悩ましげな表情を帯びた。『行ったものか、それとも行かずにすましたものか？』彼は呟いた。内部の声は告げていた。行く必要はない。このさい、まやかし以外には何一つありえないのだ。二人の関係を改善したりとりつくりたりすることは不可能だ。なぜなら妻をもう一度魅力的な、愛情を呼びおこす力のある女にすることもできなければ、自分を愛する能力のない老人にすることもできないのだから。そう内部の声は告げていた。今となつては、まやかしと虚偽のほかには、なんの結果も得られそうになかった。しかもまやかしと虚偽とは彼の本性に反していた。

『しかしいつかは行かなきやならないんだ。なんといいたってこのままですすわけにはいかなんだから』つとめて勇氣を出そうとしながら彼は言った。そしてぐつと胸を張り、煙草を一本ぬき出して火をつけ、二度ほどすばすば吸ったあと真珠貝の灰皿に煙草を捨て、陰気な客間を足早に通りぬけて、妻の寢室へ通ずるもう一つのドアを開けた。

四

ドリイは、ジャケットを羽織り、昔は濃くて美しかったが今ではもう薄くなった髪を束ねて頭のうしろへピンで留め、やせこけた顔と、面

やつれのためにつき出たような感じのする大きなおびえたような目をして、部屋いっぱい散らかした品物の間に立つたまま、戸の開いた衣裳戸棚に向かつて、中からあれこれと選び出して、夫の足音をききつけると、彼女は手をや

すめ、ドアの方へ目をやりながら、さびすむようないかつい表情を顔に浮かべようと空しく努力した。彼女は自分が夫を恐れ、目前に迫つて会見を恐れているのを感じていた。この三日間ですでに十度も試みたことを彼女はもう一度試みているところであった。つまり子供たちと自分のものをよりわけ、母のところへ運ばせるという仕事である。——思いきってそれができないのは今度も同じであつたが、しかし今度も前のとくと同じように、彼女は自分に向かつて、このままではすまされぬ、何かの手段を講じて夫を罰し、夫に恥をかかせ、夫が自分に与えた苦しみのせめて何分の一なりとも復讐すべきだ、と言いきかせていた。彼女は相変わらず夫とわかれて家を出てゆくのだと言っていたが、心の中ではそれが不可能なのを感じていた。それが不可能なのは、彼を夫と考える習慣、彼を愛する習慣を捨て去ることができないからであつた。それに彼女は、自分の家であるここにてさえ、五人の子供の世話をするのに手が回らかねるありさまだとすれば、これから自分がその子たち全部を連れていくはずの里では、子供はいまよりもっと不幸になるにちがいないという気がしていた。現にこの三日間にも、末の男の子があやしげなブイオンを飲まされて病気に

なつたし、ほかの子供たちもきのうはろくに食事をしていないではないか。彼女は出ていくのが不可能なのを感じていた。しかしそれにもかからず、彼女は自分で自分を騙しながら、相変わらず品物をよりわけでは、さも出てゆくようなふりをよおっていた。

夫の姿を見かけると、彼女は衣裳戸棚の引出しへ片手をつつこんで、何かさげしものでもしているような様子をした。そして夫が自分のすぐそばまで来てからはじめて振り返つた。しかし彼女がきびしい断乎とした表情を浮かべようと思つた顔は、困惑と苦痛の表情をあらわしていた。

「ドリイ！」夫はひくい、おずおずとした声で言った。首を肩と肩の間へひっこめて、あわれっぽいしおらしい様子をするつもりだったが、彼はやはり依然として潑刺たる健康にかがやいていた。

彼女は潑刺たる健康にかがやく夫の姿を、頭から足の先までちらとながめやつた。『そうだわ。この人は幸福で満足しきっているんだわ』彼女は思った。『ところがわたしは？……この人のいやらしい氣立ての好き。おかげでこの人はみんなから好かれもするし褒められもするけど、でもわたしはこの人の氣立ての好きが憎らしい』そう彼女は思った。口がぎゅつとしまり、青ざめた神経質な顔の右頬の筋肉がふるえだした。

「なんのご用ですの？」彼女は人が変わったような陰にこもつた声で口早に言った。

「ドリー！」彼は声にふるえをこめて繰り返した。「アンナがきょうここへやってくるんだよ」
 「それがどうしましたの？ わたし、お会いするわけにいきませんわ！」彼女は叫んだ。

「そんなむちゃな、ドリー……」

「出ていってください、出ていってください、出ていってください！」夫の顔を見ずに彼女は叫んだ。さながら肉体的な苦痛から思わずあげたような叫びだった。

オプロンスキイは、妻のことを考えている間は平静な気持でいることができた。マトヴェイの表現を借りればすべて《丸くおさまる》ことに希望をいだくこともできたし、悠々と新聞を読んだりコーヒーを飲んだりすることもできた。しかし憔悴しきったなやましげな妻の顔を見、絶望して運命に身を任せたような声音をきくと、彼は息がつまり、得体の知れないものが咽喉にこみあげ、目に涙がひかかった。

「ああ、おれはなんてことをしたんだろう！ドリー！ お願いだ！ だって……」彼は先をつづけることができなかった。嗚咽が咽喉につかえた。

彼女は戸棚をばたんとしめて夫を見た。

「ドリー。おれに何が言えるだろう？……許してくれ、許してくれ、言えるのはそのひと言だけだ。……思い出しでもみてくれ、いったい九年間の生活が、ほんの一時の、一時のあれを、つぐなうことができないなんて……」

彼女は目を伏せて、彼が何を言うかと待ちかまえながらじっときいていた。なんとかして彼

が自分の考えを変えてくれるように祈ってでもいるようだった。

「一時の浮気を……」と彼は言って、先をつづけようとした。けれどもこの言葉をきくと、まるで肉体的な痛みを感じてもしたように、唇がまたもやぎゅつとしまり、顔の右頬の筋肉がまたもやおどろだした。

「出ていってください、ここから出ていってください！」彼女は前よりもっとするどい声で叫んだ。「あなたの浮気だなんて、そんなげがらわしい話はいきさたくありません！」

彼女は出ていこうとしたが、思わずよろめいて、体を支えるために椅子の背につかまった。夫の顔は縮りがなくなり、唇はふくれ上がり、目には涙があふれていた。

「ドリー！」早くもしゃくりあげながら彼は言った。「お願いだから子供たちのことを考えてくれ。子供に罪はないじゃないか。罪はおれにあるのだ。おれを罰してくれ。おれに罪をつくなえと言ってくれ。できることならなんでもするつもりだ！ 罪はおれにあるのだ。どれくらい罪があるか、とても言葉では言えないけれども……」

「それで許してほしいのだ、ドリー！」彼女は腰をおろした。彼女の重々しい荒い息づかいをきくと、夫はなんとも言えないほど彼女があわれになった。彼女は幾度か話したぞうとしたが、話しだせなかった。彼は待った。

「あなたが子供たちのことを覚えてらっしゃるの、いっしょに遊びたいからだわ。ところがわたしは子供たちが今はもう破滅したことを、

覚えてもいるし知ってもいるのよ」彼女は言った。どうやらこれは、彼女がこの三日間に一度ならず自分に言いかけた文句の一つらしかった。

彼女が夫に向かって親しげな口をきいたので、夫は感謝の眼差で彼女をちらと見てその手を取ろうとした。しかし彼女はさも憎らしげにつとそばを離れた。

「わたしは子供たちのことを覚えています。だからこそ子供たちを救うために、この世でできることはなんでもしたいんです。でもどうやって救うか、それは自分でもわかりませんの。父親のところから連れだすか、それとも墮落した父親のところに残してゆくか、——そうですとも、墮落した父親ですわ。……さあ、言ってくださいいな。あんな……ことがあったあとでもわたしははいっしょに暮らしていきますの？」

「彼女はしだいに声を高くしながら繰り返した。『わたしの夫が、わたしの子供たちの父親が、自分の子供の家庭教師と関係したあとで……』」

「でもどうすればいいのさ？ どうすれば？」彼はあわれっぽい声で言った。自分でも何を言っているかわからず、ますます低く頭を垂れるばかりであった。

「あなたは虫酸の走るくらいいやなかたです！」彼女はしだいに興奮しながら叫んだ。「あなたの涙なんかただの水と同じですわ！ あなたはわたしを愛したことなんか一度もないんで

す。情もないし、品もないんです。虫酸の走るくらいいやなかつた、他人、そう、赤の他人ですわ！」苦痛と憎悪をこめて、自分にとつておそろしいこの《他人》という言葉、彼女は口にしました。

彼はちらと妻の顔を見た。彼女の顔にあらわれている憎悪は彼をおびえさせ、彼をおどろかせた。彼にはわからなかつたが、彼女をいらだたせたのは彼の憐愍なのであつた。彼女が夫にみとめたのは自分に対する同情でこそあれ愛ではなかつたのだ。「いや、こいつはおれを憎んでいる。許してはくれない」と彼は思った。「おそろしいことだ！ おそろしいことだ！」彼は言った。

このとき、隣の部屋で、たぶんころんだのであろう、子供の泣く声をした。ドリイは耳をすました。顔が突然やわらいだ。

どうやら彼女はすぐには気をとり直すことができないらしく、自分がどこにいて、何をすればいいのかもわからない様子だったが、やがてすばやく立ち上がるとドアの方へ行きかけた。

『やっぱりおれの子供を愛している。じゃないか』子供の泣き声で妻の顔つきが変わつたのをみとめたとき、彼はそう思った。『おれの子供を。なのはどうしておれを憎むことができるんだらう？』

「ドリイ、もうひと言」彼は妻のあとを追いながら繰り返した。

「もしあとからついていらしたら、召使を呼びますよ、子供を呼びますよ！ あなたが下種だ

つてことをみんなに知らせますよ！ わたしはきょう出ていきます。あなたはここでいろ女といっしょに暮らせばいいんです！」
そう言うなり、彼女はドアをばたんとしめて出ていった。

オプロンスキイは溜息をつき、顔をふくと、足音を忍ばせて部屋の外へ歩きだした。『マトヴェイは丸くおさまると言ってるが、どんなふうにも丸くおさまるんだ？ 当てにするのさえ無理なように思えるがなあ。ああ、ああ、おそろしいことだ！ それにあの月並みなわめきようはどうだ』彼は妻の叫び声や《下種》だの《いろ女》だのという言葉思い出しながらそうつぶやいた。「ひょっとすると女中どもにもきこえたかも知れん！ おそろしく月並みだ、おそろしく」オプロンスキイはちよつとのあいだ足をとめて、目をふき、溜息を一つつくと、胸を張って部屋を出た。

金曜日で、食堂ではドイツ人の時計師が時計のねじを巻いていた。オプロンスキイは、かつて自分がこのきちょうめんな禿げ頭の時計師のことで、あのドイツ人は《時計のねじを巻くために、自分も一生間に合うくらいねじを巻かれています》という冗談を言ったことを思い出し、そして微笑した。オプロンスキイは気のきいた冗談が好きだったのである。『だがひょつとすると丸くおさまるかも知れんて！ いい言葉だな、丸くおさまる、か』彼は考えた。『みんなに話してやらなくちゃ』

「マトヴェイ！」と彼は大きな声で呼んだ。「そ

れじゃ頼んだよ。長椅子部屋へアンナ・フルカ―ジエヴナをお入れできるように、マリヤを手伝って諸事万端用意してくれ」姿を見せたマトヴェイに彼はそう言った。

「かしこまりました」
オプロンスキイは外套を着て、表階段の上に出た。

「お食事はこちらでなさいませぬので？」見送りに出たマトヴェイが言った。

「まあ、そのときしだいだ。当座の費用に取っておいてくれ」彼はそう言いながら紙入れから十ルーブル抜き出して渡した。「足りるかね？」
「足りても足りなくても、これで間に合わせなぐちやなりませんまいて」とマトヴェイは言い、馬車の扉をばたんとしめて表階段の上へしりぞいた。

一方ドリイは、子供を落ちつかせ、馬車の音で夫が出かけたとわかると、また寝室へとつて返した。寝室は彼女の唯一の避難所で、ここから一歩外へ出ると彼女はたちまち家庭の雑事にまわりをとり巻かれる。現に今も、ほんのちよつとのあいだ子供部屋へ行つただけで、イギリス人の家庭教師とマトリ・ーナとから、自分でなければ答えられないようなのつびきならぬ質問をいくつか受けた。子供たちに何を着せて散歩に出すか？ ミルクを飲ませたものかどうか？ 新しいコックを連れてきた方がよくなるか？

「いいからほつといて、わたしをほつといてちょうだい！」と彼女は言い、寝室へ帰ると、

指輪が抜け落ちそうなほどやせて骨張った両手を握りしめながら、夫と話し合ったその同じ場所にまた腰をおろして、さっきのやりとりを逐一思い出しにかかった。『行ってしまった！』

それにしてもいったいどうやってあの女と話をつけたのだろう？』彼女は思った。『それともまだ会っているのかしら？』どうしてこのことを確かめておかなかったのだろう？ だめ。だめ。仲直りなんかできるものか。たとえこのまま一つ屋根の下で暮らすにしても、——わたしたちは他人同士だわ。永久に他人同士だわ！』彼女は自分にとっておそろしいこの言葉に特別の意味をこめて、またもや繰り返した。『でも、わたしはどんなに、どんなにあの人を愛していたことだろう！……どんなに愛していたことだろう！』それに、今だって愛してはいないだろうか？ 前よりももっと愛してはいないだろうか？ おそろしいことだ。だいいち……』心の中でそう言いかけたが、みなまで言うことができなかった。マトリョーナがドアから顔を出したからである。

「せひとも弟を呼びにやらせてくださいまし」彼女は言った。「あれならお料理はなんでも作れますから。このままでは、きのうみたいに、お子たちが六時まではご飯を召し上がれなくなってしまうます」

「そう。いいわ。わたしがすぐに行つて始末するから。それはそうと、新しいミルクは取りにやつたかしら？」

こうしてドリーはその日の雑用に没頭し、ほ

五

んのいっとき、その中へ自分の悲しみを沈めた。

オブロンスキイは学校では素質がよかったから勉強はできるほうだったが、怠けもので、いたずら小僧で、そのため卒業のときはどんじりに近かった。しかし、いつも放埒な暮しをしている上に、官等も低く、年もさほどとっていない上にもかわらず、モスクワのある役所で部長の要職を占め、俸給もよかった。この地位を斡旋してくれたのは妹アンナの夫、アレクセイ・アレクサンドロヴィチ・カレニンで、この人物は彼の役所の監督官庁である某省の高官の一人だったのである。しかしたとえカレニンが義兄をこの地位につけなかったとしても、ステイーヴァ・オブロンスキイは、兄弟とか、姉妹とか、いとことか、叔父とか、叔母とか、百人ほどもいるそうした連中を通じて、同じでないまでも似よりの地位を手に入れていただろう。彼としては約六千ルーブルの年俸はどうしても必要であった。妻にかなりの資産があったにもかかわらず、彼の財政は紊乱していたからである。

モスクワとペテルブルクとの半分が、オブロンスキイの親戚か友人であった。彼はこの世の強者、ないしは強者になった人々の間に生まれた。国家的人物の三分の一にあたる老人たちにはみな父の友人で、彼を子供のときから知っていたし、三分の一は彼と「きみ、ぼく」の間柄だったし、残りの三分の一は懇意な知り合いだ

だった。したがって、地位とか、賃貸借とか、利権とか、そういった地上の幸福の配分者たちは、全部彼の友人だったわけで、その連中が仲間を袖にするはずもなく、オブロンスキイも有利な地位を手に入れるために特別に骨を折る必要はなかった。人の頼みをこつたり、人をうらやんだり、喧嘩をしたり、腹を立てたりさえしなければそれでよかった。しかも生れつき善良な彼は、そんなふるまいをしたことは一度もないのであった。かりに人から、あなたの必要とするような俸給のついた地位を手に入れることはできないだろうと言われても、彼は冗談としか思わなかったろう。だいいち彼はなにも法外な要求をしているわけではなかった。同年輩の者に与えられるのと同じものがほしいだけであつた。それにそうした種類の職務を果たしてゆくことならだれにもひけはとらなかつた。

オブロンスキイは人のいい、快活なたちで、しかも疑いもなく正直であつたから、面識のあるすべての人々に好かれていた。そればかりか彼の端整なあかるい顔立ちや、かがやかしい目つきや、黒い眉や髪や、白に紅みのさした顔の色には、会う人ごとに親しみぶかい楽しい生理的作用を及ぼす何ものかがあつた。「おや！ステイーヴァッダ！ オブロンスキイだ！ あの男だ！」彼と会うと、みんなはほとんどいつもよろこばしげな微笑を浮かべてそう言つた。話してみたが特別よろこばしいことは何もなかつた、というようなきもときにはあつたが——その翌日、翌々日になると、またもやみんな